

## 移植腸管微細循環の客観的評価

著者	平能 康充, 大村 健二, 吉羽 秀磨, 小島 一人, 太田 尚宏, 奥田 俊之, 塚山 正市, 平沼 知加志, 渡邊 剛
著者別名	Hirano, Yasumitsu Omura, Kenji Yoshiba, Hidemaro Kojima, Kazuto Ota, Naohiro Okuda, Toshiyuki Tsukayama, Shoichi Hiranuma, Chikashi Watanabe, Go
雑誌名	日本消化器外科学会雑誌
巻	36
号	7
ページ	977-977
発行年	2003-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3970">http://hdl.handle.net/2297/3970</a>

PP-1-417

移植腸管微細循環の客観的評価

平能康充, 大村健二, 吉羽秀麿, 小島一人, 太田尚宏, 奥田俊之, 塚山正市, 平沼知加志,  
渡邊 剛

(金沢大学心肺・総合外科)

【はじめに】今回我々は、二波長の近赤外線分光装置 (PSA-500 バイオメディカルサイエンス社製) と超音波血流計を用い、移植腸管の微細循環の客観的評価を試みた。【材料および方法】雌ブタ 12 頭を用いた。咽頭喉頭頸部食道切除を施行し、次いで遊離空腸移植により頸部食道を再建した。なお、血管吻合を先行させ、血流遮断時間は全例で 60 分とした。移植空腸と頸部食道は全例で端々吻合とし、咽頭と移植空腸は端々吻合 (n=6) と端側吻合 (n=6) の二群に分けた。再建終了前後で移植腸管の組織酸素飽和度と流入動脈血流量を PSA-500 と超音波血流計を用いて測定した。【結果】流入動脈血流量と組織酸素飽和度の間には、ともに有意な相関を認めた ( $p < 0.01$ )。また、移植腸管の組織酸素飽和度 (StO<sub>2</sub>) は移植片の中央で最も高く、中央から離れるにしたがって有意に低下した ( $p < 0.05$ )。また、端側吻合群の StO<sub>2</sub> は端端吻合群より高値であった ( $p < 0.05$ )。【考察】PSA-500 で測定した StO<sub>2</sub> は腸管の流入動脈の血流量と相関しており、消化管手術における腸管の微細循環の評価に有用であると思われた。

-----